

共起関係を表す時間節のテンスと文の解釈

家 田 章 子

1. はじめに

初級の文法として扱われる「アイダ」「アイダニ」の使い分けについては、多くの日本語の教科書や文法辞典等で説明がされている。「アイダ」はその従属節で示された期間ずっとという意味を表し、主節には継続する動作や状態を表す表現が来る。それに対して、「アイダニ」は主節に点でとらえられるような瞬間的な表現が用いられ、その出来事や動作が従属節で示された期間の中のどこかの時点で起こったということを示している。

- (1) 夏休みの間、国に帰っていました。
- (2) 夏休みの間に、富士山に登りました。

日本語の教科書でこれらの表現が導入される際、「アイダ(ニ)」に前接する動詞については、非過去の表現がほとんどである。そんな中で、『ニューアプローチ中級基礎編 改訂版 練習帳』に以下のような問題があり、webで公開されている解答例では「アイダ」の前に「～ていた」という過去の形が用いられている。

- (3) 私が病気で_____間、母がずっとそばに_____くれた。
(p. 43)

【解答例】

私が病気で入院していた間、母がずっとそばについていてくれた。

確かに、この文では非過去の「入院している間」でも「入院していた間」という過去形でも違和感はないが、過去の出来事を表している文なら「～ている間」と「～ていた間」のどちらも使用可能かを改めて考えると、(4)のように強い違和感が生じるものもある。

- (4) 「小沢さんはしゃべっている間、ずっと藤井さんをにらみつけていた」
(朝日新聞 2010年1月6日朝刊)
- (4)' ?? 「小沢さんはしゃべっていた間、ずっと藤井さんをにらみつけていた」

本稿では「アイダ (二)」節で過去形がどのように使われているのかを調べ、過去形を用いた場合、どのように解釈されるのか、また、過去形を用いると違和感が生じる文があるのはなぜかについて考察する。

2. 日本語の教科書や文型辞典における記述

2.1 日本語教科書の例文

まず、今回の考察のきっかけとなった日本語の教材では、過去の出来事を表している「アイダ (二)」の例文として、どのようなものがあるかを概観する。

『初級日本語 げんき II』(坂野ほか 1999:185-186)

- (5) ルームメイトがコンピューターを使っている間、私は本を読んで待

ちました。

- (6) お風呂に入っている間に電話がありました。
- (7) ゆうべ、寝ている間に地震がありました。

『中級へ行こう』(平井・三輪 2004:97-98)

- (8) 彼が出かけているあいだ、わたしはずっと手紙を書いていた。
- (9) 電車に乗っているあいだに、友だちからメールの返事が来た。

『ニューアプローチ中級基礎編』(小柳 2003:59)

- (10) 母が出張で家にいない間、私がみんなの食事を作った。

『初級日本語文法総まとめポイント20』(友松・和栗 2004:61)

- (11) わたしは日本にいる間に結婚しました。

『くらべてわかる 初級日本語表現文型ドリル』(岡本・氏原 2010:15)

- (12) A : Bさん、イタリア語できるの？
B : ううん、パスタ屋でバイトしているあいだにちょっと覚えただけ。

いずれも従属節は非過去の形である。また、「Vている」の形で提示されているものがほとんどであることが分かる。また、これらの教科書では、過去の出来事を表す場合に従属節に過去形を取りうることについては言及されていない。

2.2 文型辞典等での記述

文法の辞典や解説書では、「アイダ(ニ)」節の動詞がどのような形で接続するかが明記されている。以下にその動詞の接続の形と例文を挙げる。

『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(松岡 2000:205)

【V (辞書形) + あいだ／あいだに】

(13) 子供が寝ているあいだに洗濯をした。

『中級日本語文法と教え方のポイント』(市川 2007:260-261, 264)

【V-る／V-ない／V-ている + あいだ (は)／あいだに】

(14) 彼女が着替えているあいだ (は)、僕は外で待っていた。

(15) 大学に通っているあいだ、ずっと京都に住んでいた。

(16) 出かけているあいだに、空き巣に入られた。

(17) 本を読んでいるあいだに、眠くなってしまった。

『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』

(Makino and MTsutsui 1986:68-69)

【V-ている + 間／間に】

(18) 私がご飯を食べている間山田さんはテレビを見ていた。

(19) スミスさんは日本にいる間英語を教えていました。

(20) 子供達がテレビを見ている間私は本を読んでいました。

(21) 私がご飯を食べている間に山田さんが来た。

(22) 高橋さんはアメリカにいる間にゴルフを覚えました。

(23) 中川さんのお母さんは中川さんがパリに留学している間に病気になりました。

『どんときどう使う日本語表現文型辞典』(友松ほか 2007:22)

【V (普通形) + 間／間に】

(24) 両親が旅行をしている間、ぼくが毎日食事を作りました。

『日本語文型辞典』(グループ・ジャマシイ 1998:2-3)

【V-ている／V-る + あいだ】

- (25) 友子は、大阪にいる間は元気だったが、東京に引っ越したとたん
体をこわしてしまった。
- (26) 私たちがお茶の用意をする間、彼らは緊張して一言もしゃべらずに
座っていた。
- (27) 彼はドイツに留学していた間、スウェーデン人の女の子と一緒
に生活してたらしい。

【Vーている／Vーる+あいだに】

- (28) 家族がみんな寝ている間に家を出ることにした。
- (29) リサが日本にいる間に一緒に旅行したかったのだが、残念ながらで
きなかった。
- (30) 私がてんぷらを揚げる間に、母はおひたしと酢の物と味噌汁まで
作ってしまった。

最後に挙げたグループ・ジャマシイ(1998)では、過去のことについて言う場合に、「Vーていた／Aーかった あいだ」「…たあいだに」の形も用いられることが言及されており、過去形を用いた例文((27))も挙げられている。また、例文では示されていないが、友松ほか(2007)では「普通形」が接続すると記載されているので、過去形も用いられる可能性があることを示唆している。

3. 「アイダ (ニ)」節における過去形の出現頻度

2.1 および2.2節でみたように、「アイダ (ニ)」節に過去形を用いることができることを言及しているものは、この表現が初めて導入される初級日本語の教科書にはなかった。また、文型・表現を解説している書籍においても、過去形の使用可能性に触れているものは少ない。母語話者の直感でも「過去形+アイダ (ニ)」はそれほど多く用いないように感じるが、実際の使用ではどうなのだろうか。新聞のデータベースでその出現数を確認

することでそれを検証してみたい。

朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱビジュアル」で1985年から2011年の27年間の記事を対象に「～テイルアイダ(ニ)」、「～テイタアイダ(ニ)」を含む記事を検索した。¹「アイダ(ニ)」には、「～テイル」以外の形も接続するが、時間節の「アイダ(ニ)」のみを過不足なく拾うことは困難だと判断し、「アイダ(ニ)」の例文として日本語の教科書や文型辞典等で多くの割合を占めていた「～テイル」の接続のみを検索対象とした。朝日新聞のデータベースにおけるキーワード検索は、記事に含まれる文字列を指定して、対象とした文字列が含まれているかどうかで行われる。そのため、「アイダ」に関しては、漢字で表記されている場合とひらがなで表記されている場合の両方を、「て形」に関しては、「ている」と「でいる」の両方を検索の対象とした。また、「アイダ(ニ)」だけ検索しても、過去形の使用頻度が高いのか低いのかの判断ができないため、「アイダ(ニ)」と同様に「共起的時間関係」(後述)を表す「トキ(ニ)」の表現と比較するため、「～テイルトキ(ニ)」、「～テイタトキ(ニ)」も検索することとした。検索の結果をまとめると以下ようになる。²

	アイダ(ニ)、	トキ(ニ)、
～テイル ³	4706件	7632件
～テイタ	334件	7990件

「トキ(ニ)」が「～テイル」と「～テイタ」の出現記事数に大きな差が無いのに対し、「アイダ(ニ)」では「～テイタ」が「～テイル」に比べて極端に少ないことが分かる。このことから、「アイダ(ニ)」節で過去形を用いることができるのは、まれなケースであることが分かる。

¹ 「聞蔵Ⅱビジュアル」は1984年8月から検索日当日までの記事を対象に検索をすることが可能であるが、1984年と2012年は執筆の時点で12カ月分が網羅されていないため、今回の検索対象からは外した。

² 検索した具体的な表現と出現記事数は、後掲の資料を参照。

³ 「～テイル」には主節が過去形のものとは非過去形のものとも両方が含まれている。

4. 先行研究

4.1 時間節の分類

「アイダ(ニ)」節における過去形の使用を考察するにあたり、まず、「アイダ」「アイダニ」が何を表す表現であるかを整理し、時間関係を表す複態の中の位置づけをみる。

日本語記述文法研究会(2007)では、時間節とは「主節の動きや状態が成立する時を別の事態との関係によって限定する従属節」であり、主節の動きや状態が成立する時との時間的關係によって、同時であることを表すもの、期間を表すもの、前後関係を表すもの等に分けられる、⁴と述べられている。

同時を表す時間節とは、従属節の事態と主節の事態の成立が、ほぼ同時であることをあらわす時間節であり、「トキ」「トキニ」「トキ(ニ)ハ」がその主要な形式として挙げられる。期間を表す時間節は、「アイダ」「アイダニ」「アイダニハ」が代表的な形式で、従属節の事態の成立期間に主節の事態が成立することを表す。また、前後関係を表す時間節は、主節の事態との間に前後関係がある別の事態を述べることによって主節を時間的に限定する従属節のことで、「マエ」「アト」を中心とした形式が挙げられる。時間節の分類は、以下のようにまとめられる。

表している関係	代表的な表現
同時	トキ、トキニ、トキ(ニ)ハ 等
期間	アイダ、アイダニ、アイダニハ 等
前後	マエ、アト 等

上記の分類は、主節と従属節の出来事の成立を点でとらえてその前後関

⁴ 日本語記述文法研究会(2008)では、時間節には、この他にも「ところ」「なか」「うえ」のように、時間的な意味に加え、空間的な意味も表わす節もあることが指摘されている。

係（前か後か、同時か）で分類する観点と、一定の長さがあるかどうかという観点の二つが混在している。「アイダ」については「期間」を表す表現という分類になっているが、「アイダ」は、(31)に見られるように、従属節と主節の二つの事態が時間的に重なっているという点において「同時」を表しているとも言える。

(31) 日本にいる間、いろいろなところを旅行した。

（「日本にいる」と「旅行する」は時間的に重なっている）

工藤(1995)では、時間関係を表す複文について、時間的順序性（タクシス）の観点と時間巾（時間的枠づけ方）の観点の二つの観点から体系化している。まず、時間を表す従属節は、従属節の出来事と主節の出来事の時間的順序関係の観点から、「共起的時間関係」を表すグループと「継起的時間関係」を表すグループに分けている。また、時間の巾という観点から、主節の出来事の成立時期を限定するものと、成立期間を限定するものに分けている。さらに、「継起的時間関係」を表すグループには後続を示すものと、先行を示すものがあるとしている。

		時期	期間
共起（同時）		トキ（ニ）	アイダ（ニ）
継起	後続（－先行）	マエ（ニ）	マデ（ニ）
	先行（－後続）	アト（デ）	カラ

（工藤 1995:222）

本稿では、この分類の方法に従って考察する。それは、「アイダ」は単に期間を限定する表現ではなく、常に「共起（同時）性」を伴う表現であるため、この観点は、「アイダ」の分析に欠かせない視点であると考えからである。

4.2 時間節とテンス

多くの日本語の教科書で説明があるように、時間節の複文においては、相対テンスを理解しないと、正しい日本語の文を作ることができない。主節の主節の述語（ ）は、発話時を基準とした絶対テンスであるが、時間節の述語（ ）のテンスは主節の述語を基準として、それより前に起きているか、後に起きているかを示す相対テンスである。このため、「マエ」は非過去、「アト」は過去の述語に接続し、主節が過去でも、従属節には非過去の述語が現れたり((32))、逆に主節が非過去でも、従属節に過去の述語が現れることもあり((34))、日本語学習者の誤用も多い。

(32) 学校へ行く前に病院に行った。

(33) * 学校へ行った前に病院に行った。

(34) 病院へ行った後で、学校に行く。

(35) * 病院へ行く後で、学校に行く。

ただし、共起（同時）関係を表す時間節では、非過去、過去の両方の述語を用いることができ、相対テンスの解釈と、絶対テンスの解釈が可能であることが指摘されている（原沢 2010）。

(36) 太郎が寝ているときに、布団をかけた。（相対テンスの解釈）

(37) 太郎が寝ていたときに、布団をかけた。（絶対テンスの解釈）

※ は絶対テンス、 は相対テンスを表している(原沢 2010:70)

工藤(1995)は、このような非過去、過去の両方の述語を用いることができることについて、継起タクシスでは「スルーシタ」の対立は相対テンス対立となるのに対し、<共起（同時）性>タクシスでは、出来事自体の内部の時間的段階の相違で対立すると述べている。

【継起タクシス】

主節の出来事時基準の相対的テンス対立

< (完成相) 未来 - (完成相) 過去 >

(38) 着物を着る前に、髪を結った。

(着るという動作全体が、主節の出来事より後)

(39) 着物を着た後、ドレスになった。

(着るという動作全体が、主節の出来事より前)

【同時タクシス】

出来事内部のアスペクト対立

< 限界達成前 - 限界達成後 >

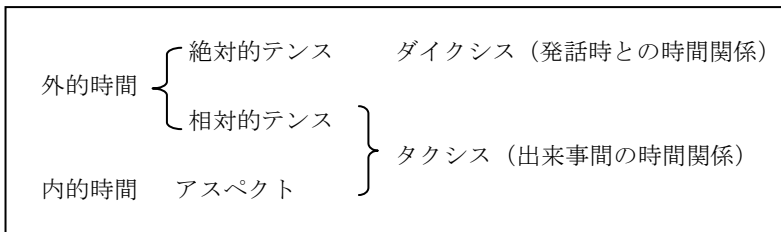
(40) 着物を着る時、左右を間違えた。

(着るという動作が限界に達するのは、主節の出来事より後)

(41) 物を着た時 (は)、静かにゆっくり歩いた。

(着るという動作が限界に達するのは、主節の出来事より前)

また、このような相対テンスは両義的であり、一方で基準軸との外的時間関係を表し分ける点で絶対的テンスと共通し、他方では、発話対象としての出来事間の時間関係 (タクシス) を表し分ける機能を果たすという点で、アスペクトと共通すると述べている。



この<継起性-同時性>というタクシスの対立は従属文において絶対的テンスの使用が可能かどうかも決定する。継起タクシスでは、絶対的テンスと使用することができないが、同時タクシスの場合には、絶対的テンス使用が可能であるとしている。

(42) 昨日、本を〔読んでいる／読んでいた〕時、おもしろい事実に気がついた。

(43) 京都に〔滞在している／滞在していた〕間、ずっと雨だった。

(工藤 1995:227)

上記の二つの例文は、アスペクト的意味(継続性)が変わらないままに「シテイル」が相対テンス的に、「シテイタ」が絶対テンス的に使われていることを示したものである。

5. 共起(同時)関係の時間節と述語の制限

時間節に用いられる述語には制限がある。「アイダ(ニ)」は「期間」を表す表現であるため、その節にはいわゆる「瞬間動詞」を用いることができない。しかし、「瞬間動詞」であっても「～ている」の形で、動きの結果を表す形にすれば、「アイダ(ニ)」節でも用いることができる。

(44) *電気が消える間、懐中電灯とろうそくで過ごした。

(45) 電気が消えている間、懐中電灯とろうそくで過ごした。

日本語記述文法研究会(2008)は、期間を表す時間節について、「従属節の事態は、過程を持った動きや存在の状態であり、形容詞の表すような状態はやや現れにくく、過程を持たない動きは現れない」と述べている。

(46) ?チーズがやわらかいあいだに、材料を入れてください。

(47) *2人が {結婚する／結婚している} あいだに、花束が届いた。

しかし、この制約のうち、(46)については、「アイダ」節であれば不自然だが、「アイダニ」節なら違和感なく用いられると考えられる。「アイダ節」で違和感があるのは、形容詞か否かという要因ではなく、主節の動作（材料を入れる）が1回限りの瞬間的な動作であるので、「アイダ」節では用いることができないためである。ただし、(46)の文は、単純な期間を示しているのではなく、時間が経つと「やわらかくなくなる」ことが意識されているように理解され、「うちに」に近い意味として解釈される。また、(47)は非文と判断されているが、「結婚している」自体は、以下のように「アイダ (ニ)」節に現れることができる。

(48) 2人は結婚している間 (に)、何度もホームパーティーを開いた。

これは、「結婚する」という動作の結果が継続している状態を表しているためであり、使用制限の妨げにはならない。

6. 「アイダ (ニ)」節における過去と非過去

日本語記述文法研究会(2007)では、「アイダ」節において、状態的な意味を持つ動詞述語をとるときには、非過去形と過去形のどちらも現れることができる((49))が、動き動詞や形容詞をとるときには非過去形しか現れることができない((50)(51))と述べられている。

(49) 家に {いる／いた} あいだ、田中さんはシチューを煮込んでいた。

(50) 社長が報告書を {読む／*読んだ} あいだ、社員は緊張して待機していた。

(51) 外が {暑い/?暑かった} あいだは、何もする気が起らなかった。

(日本語記述文法研究会 2007:194)

動き動詞は「V-る」「V-た」の形では、非過去形しか現れないが、「～ている」「～ていた」の形にすることで状态的な述語となり、過去の形も現れる。

(52) 私がてんぷらを {揚げる/*揚げた} 間に、母はおひたしと酢の物と味噌汁まで作ってしまった。(=(30))

(53) 私がご飯を {食べている/食べていた} あいだ、山田さんはテレビを見ていた。(=(18))

(54) 彼女が {着替えている/着替えていた} あいだ、僕は外で待っていた。(=(14))

また、形容詞については、非文「*」ではなく、不自然「?」という判断がされているが、以下のような実例がみられる。

(55) 沖縄国会で騒がしかった間に、いくつか歌の話題があった。

(1997年4月17日 朝日新聞)

(56) 昨夏の甲子園で青森山田に好投した佐藤竜哉(3年)は昨秋、登板機会が少なかった間に下半身を鍛え、制球力が上がった。

(2008年3月25日 朝日新聞)

(57) 暑ければ暑いで、「暑くて何にもしたくない」と思うし、雨の日が続けば、うっとうしくて嫌だし涼しかった間だけは畑仕事も順調に進んでいました。(2006年12月1日 朝日新聞)

(58) 関東リーグを制した国士大はMF山根とFW白尾がこの代表メンバ

一。特に身長168センチの山根は、外国の大柄なDF相手に強引な突破を見せて再三、好機を作った。しかも、その山根が代表で抜けることが多かった間にチームは成長。

(2001年11月7日 朝日新聞)

(59) 日本軍の勢いが強かった間は、捕虜生活といっても、さほどの深刻さはなかった。(1991年9月11日 朝日新聞)

このように、形容詞の過去形も「アイダ (二)」節で用いることができる。過去形になった場合も、5.節で言及したように「アイダ (二)」節で表されている状態が、時間が経過することによって変化し、いずれその状態ではなくなることを表すため、「うち／うちに」に近い意味で用いられているものもある。非過去形が用いられた場合と過去形が用いられた場合との決定的な解釈の違いは、発話時現在と「アイダ (二)」節との関係である。次の二つの例はどちらも文法的に認められるが、「暇だ」という状況が現在も続いているか否かという点で大きな違いがある。

(60) 暇だった間、いろいろな勉強をした。(今は暇ではない)

(61) 暇な間、いろいろな勉強をした。(今も暇どうかは不明)

このような違いは、形容詞だけでなく動詞にもあてはまる。同時関係を表す従属節において動詞の過去形が用いられた場合と非過去形が用いられた場合との違いの有無について、日本語記述文法研究会(2007)は、「アイダ」節は主節と同時的なので、意味的には違いがないとしている。一方、原沢(2010)は、主節と一緒にまとめて捉えられると、絶対テンスの解釈になると述べている。

(62) 太郎が寝ているときに、布団をかけた。(相対テンスの解釈)

(=(36))

(63) 太郎が寝ていたときに、布団をかけた。(絶対テンスの解釈)

(=(37))

また、工藤(1995)も、「シテイル」が相対テンス的に、「シテイタ」が絶対テンス的に解釈されるとしたうえで、相対テンスの場合、いつその動作が行われたかを前面に出す解釈となるのに対し、絶対テンスの場合は、一括してまとめて捉えられ、同時性が前面に出ると指摘している。上記の二つの例文は、同じ事実を表しているので、どのような場合に主節と「一緒にまとめて／一括してまとめて」捉えるのかを考察する必要がある。非過去形と過去形の両方が現れる場合に、意味的には違いがないかどうか具体的に考えて行きたい。例えば、以下のような例文では、「アイダ(二)」節の動詞を過去形(バイトしていた)に変えても文法的にはおかしくないが、「現在はパスタ屋でバイトをしていない」場合にしか過去形を用いることはできない。

(64) A : Bさん、イタリア語できるの？

B : ううん、パスタ屋でバイトして {いる／いた} あいだにちょっと覚えてだけ。(=(12))

つまり、「～ているあいだ」の場合は、現在もパスタ屋のアルバイトを続けていると解釈される場合も、現在はやめていると解釈される場合もあるが、「～ていたあいだ」については、現在はアルバイトをしていないという解釈のみが可能であるといえる。このことは、シテイルが相対テンスの解釈、シテイタが絶対テンスの解釈をしている例だと言える。

工藤(1995)の言うように「絶対テンス的解釈をした場合は時間節の動作と主節の動作が一括してまとめて捉えられ、同時性が前面にでる」という

ことが過去形を使った場合の解釈だとすると、以下の文の過去形も文法的だと認められても良さそうだが、実際には、強い違和感がある。

(65) 「小沢さんは {しゃべっている / ??しゃべっていた} 間、ずっと藤井さんをにらみつけていた」 (= (4))

(66) 海やいくつもの戦跡を {見ている / ??見ていた} 間、ずっと千恵子さんを思っていました。 (朝日新聞 2010年6月23日朝刊)

「しゃべっていた」や「見ていた」は発話時よりも以前に起こったことであり、絶対テンスの解釈をするという点では問題がないが、「アイダ(二)」節に過去形を用いにくいという点で、これまでみてきた文とは異なっている。この二つの文に共通するのは、複数の動作が同一主体によっている点であるが、動作主が同じである文の全てで過去形が用いられないというわけではない。以下の文では、「留学していた」のも「生活してた」のも同じ「彼」である。

(67) 彼はドイツに留学していた間、スウェーデン人の女の子と一緒に生活してたらしい。 (= (27))

この場合、「留学する」は瞬間動詞で、「留学していた」は結果の継続を表しているため、二つの動作を同時に行っている先の例とは異なる性質を持つ。この違いは、(65)(66)は同時進行の「ながら」で言い換えることができるが、(67)は言い換えができないことから分かる。⁵

(65)' 小沢さんはしゃべりながら、ずっと藤井さんをにらみつけていた。

⁵ 逆接の「ながら」であれば、非文にはならない。

- (66) 海やいくつもの戦跡を見ながら、ずっと千恵子さんを思っていました。
- (67) *彼はドイツに留学しながら、スウェーデン人の女の子と一緒に生活してたらしい。

「ながら」に言い換えられるのは、一人の主体が複数の動作を同時に行っている場合のみであり、このような場合は、過去形を用いるのが困難なようである。試しに、これらの文の主節に「アイダ」節とは異なる動作主を補ってみると、文法的に違和感なく認められる。

- (68) 「小沢さんがしゃべっていた間、彼に近い議員はずっと藤井さんを見つめていた」
- (69) 友人が海やいくつもの戦跡を見ていた間、私はずっと千恵子さんを思っていました。

このことから、「アイダ」節、主節ともに動作的な動詞が現れる場合は、従属節と主節の動作主が異なる場合に限って、過去形を用いることができると言える。このことと、先行研究における過去形を用いると一括としてとらえられることができる」という指摘との関係を考えてみたい。「アイダ」節で過去形を用いると、時間的な時間の一致を表すことができるが、それは、ももとは「別々の事態」としてとらえているものを、時間的に重なっているということを示しているにすぎない。逆にいえば、「別々の事態」として捉えられていない場合には、「アイダ」節で過去形を用いることはできないのだと考えれば、一人の動作主が二つの動作を同時に行っている場合には、過去形を用いることはできないという点も、矛盾なく説明できる。

7. おわりに

本稿では、「アイダ (二)」節でどのような述語を用いることができるかを考察した。動詞については、「アイダ (二)」節で過去形をとることは可能ではあるが、「アイダ (二)」節と同様に共起 (同時) 関係を表す「トキ (二)」節と比較すると、極端に使用頻度が低いことが新聞のデータベースから分かった。同時関係の従属節において動詞の過去形が用いられた場合に「主節と一括して／まとめて」捉えるという先行研究での記述は、「もともと別の事態」が同じ時間に重なっているという「同時性が前面に」出ていると考えるべきである。

また、「アイダ (二)」節の述語で過去形を用いることができるのは、「アイダ (二)」節の状態が現在は続いておらず、発話時現在と切り離されている場合であること、「ながら」で言いかえられるような一人の動作主による同時進行の文では、用いることができないことが分かった。

形容詞については、その使用は可能であり、形容詞の過去形を用いた場合は、動詞と同様に「アイダ (二)」節で示された状態が現在とは切り離されている必要があることを述べた。

検索データ資料(朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」1985年～2011年)

【テイルアイダ(ニ)】4706件

検索文字列	出現数	検索文字列	出現数
ている間、	1838	でいる間、	108
ているあいだ、	28	でいるあいだ、	2
ている間に、	2526	でいる間に、	165
ているあいだに、	38	でいるあいだに、	1

【テイタアイダ(ニ)】334件

検索文字列	出現数	検索文字列	出現数
ていた間、	180	でいた間、	15
ていたあいだ、	1	でいたあいだ、	0
ていた間に、	128	でいた間に、	7
ていたあいだに、	2	でいたあいだに、	1

【テイルトキ(ニ)】7632件

検索文字列	出現数	検索文字列	出現数
ている時、	2242	でいる時、	259
ているとき、	1832	でいるとき、	241
ている時に、	1663	でいる時に、	175
ているときに、	1094	でいるときに、	126

【テイタトキ(ニ)】7990件

検索文字列	出現数	検索文字列	出現数
ていた時、	3650	でいた時、	467
ていたとき、	2495	でいたとき、	336
ていた時に、	596	でいた時に、	70
ていたときに、	323	でいたときに、	53

参考文献

- Makino, Seiichi and Michio Tsutsui (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times.
- 市川保子(2007)『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 岡本牧子・氏原庸子(2010)『くらべてわかる 初級日本語表現文型ドリル』Jリサーチ出版
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト ―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ(編著)(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 小柳昇(2003)『ニューアプローチ中級基礎編 改訂版』語文研究社
- 小柳昇・岩井理子・金根熙・中村かおり(2004)『ニューアプローチ中級基礎編 改定版 練習帳』語文研究社(練習帳の解答例 <http://nihongo-net.jp/>)
- 友松悦子・和栗雅子(2004)『初級日本語文法総まとめポイント20』スリーエーネットワーク
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子(2007)『どんなときどう使う日本語表現文型辞典』アルク
- 日本語記述文法研究会(編)(2007)『現代日本語文法③』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編)(2008)『現代日本語文法⑥』くろしお出版
- 坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子・渡嘉敷恭子(1999)『初級日本語げんきⅡ』The Japan Times
- 平井悦子・三輪さち子(2004)『中級へ行こう』スリーエーネットワーク
- 松岡弘 監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 原沢伊都夫(2010)『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』スリーエーネットワーク